

<b>Title</b>	清水昭博著：『古代日韓造瓦技術の交流史』（清文堂出版、12年03月刊行）
<b>Author</b>	亀田，修一
<b>Citation</b>	市大日本史. 16 卷, p.204-207.
<b>Issue Date</b>	2013-05
<b>ISSN</b>	1348-4508
<b>Type</b>	Article
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学日本史学会
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University

【書評】

清水昭博著

『古代日韓造瓦技術の交流史』

(清文堂出版、12年03月刊行)

亀田修一

一

本書は、清水昭博さんが二〇〇九年三月に、大阪市立大学に提出された学位論文「古代における日韓造瓦技術交流史の研究―古代日本と百済の造瓦技術と瓦生産体制に関する比較研究―」をもとに加筆修正されたもので、二〇〇〇年から二〇一二年までの一三年間に書きためられた日本と百済の造瓦技術と瓦生産体制に関する八本の論文に手を加え、新たに六本の論考を書き加えてまとめられたものである。その構成は次の通りである。

序 研究の課題と本書の方法

第1部 日本の造瓦技術と初期瓦生産体制

はじめに

第1章 飛鳥寺式、斑鳩寺式軒丸瓦の成立と展開

第2章 奥山麿寺式、豊浦寺式軒丸瓦の成立と展開

第3章 船橋麿寺式軒丸瓦の成立と展開

第4章 初期瓦窯の造瓦技術―単上り瓦窯を例として―

第5章 初期瓦窯の操業体制―単上り瓦窯と楠葉平野山瓦窯―

第6章 初期瓦生産期の造瓦技術と生産体制

第2部 百済の造瓦技術と瓦生産体制

はじめに

第1章 熊津、泗泚時代の素弁蓮華文軒丸瓦の系統とその展開

第2章 百済における「大通寺式」軒丸瓦の造瓦技術

第3章 消費地からみた泗泚時代の瓦生産―軍守里麿寺を例として―

第4章 泗泚時代の瓦窯における生産と技術―亭岩里窯跡を例として―

第5章 百済の造瓦技術と瓦生産体制

結 論 古代日本と百済の造瓦技術と瓦生産体制

このように二部で構成され、第1部では日本の造瓦技術と初期瓦生産体制、第2部では百済の造瓦技術と瓦生産体制を対象として論を進め、第2部結論で両者をまとめられている。

二

各章ごとにその概要を述べると、まず序において、これまでの研究の歴史を紹介、整理され、本書の方向性について述べられている。

第1部では、日本の造瓦技術と初期瓦生産体制について論じられて

いるが、その「はじめに」において、対象としている日本の初期の瓦である素弁蓮華文軒丸瓦に関わる研究の歴史を整理・検討され、第1部における問題点・論の進め方について述べられている。

第1部第1章から第3章では、日本の初期の素弁蓮華文軒丸瓦である飛鳥寺式・斑鳩寺式、奥山麿寺式・豊浦寺式、船橋麿寺式の軒丸瓦について、系譜・展開・製作技法とその生産地を検討され、整理されている。その中で豊浦寺式はこれまで高句麗系と呼ばれていたが、中国南朝の瓦が古新羅時代に受け入れられ、それが日本に伝えられたと述べられている。

第4章では、実態がかなり把握されている山背隼上り瓦窯資料の文様・製作技術を丁寧に整理・検討され、時間的変遷をまとめられている。さらに周辺の瓦窯資料を合わせ検討され、瓦当文様と技術の関わりから工人グループの複雑化の始まりを述べられている。

第5章では、隼上り瓦窯資料の範キズの進行状況を細かくチェックすることによって、操業の順序あり方を検討されている。さらに楠葉平野山瓦窯もあわせ検討することで、複数窯による操業体制が初期瓦生産のあり方であると述べられている。

第6章は、第1部第1章から第5章までの成果をまとめ、日本における初期瓦生産期の造瓦技術と生産体制を整理されている。まず初期の瓦では文様と造瓦技術の関係が飛鳥寺などでは比較的明確に分かれていたが、六二〇年頃から分岐・複雑化し始めることを述べられ、初期の瓦生産体制の特徴が「遠隔地生産体制」「瓦陶兼業体制」「複数

供給体制」「複数生産体制」にあり、一部の「在地生産」「専用窯」などと絡み合いながら展開していたことを述べられている。

次に、第2部では、百済の造瓦技術と瓦生産体制について論じられている。まず「はじめに」において対象とする朝鮮半島・百済の瓦に関する研究の歴史を整理・検討され、第2部における問題点の整理論の進め方について述べられている。

第2部第1章は、学位論文のために新たに執筆されたもののようにある。この章では、百済瓦の中心をしめる素弁蓮華文軒丸瓦について、これまでの百済瓦の研究成果を踏まえながら、清水さんなりの文様変遷・展開・年代観を提示されている。

第2章では、百済瓦の大きな柱となっている「大通寺式」軒丸瓦を扱われている。まずその名称を改めて提唱され、その成立については技法面の検討からも中国南朝からの影響によることを述べ、その後の影響についても述べられている。そして「大通寺式」は文様・製作技法などの特徴から少なくとも四グループに分かれ、そのうちの一つである金德里系瓦工集団が日本の飛鳥寺造営に関わることを指摘されている。またこのグループを検討する中で瓦の胎土の特徴も取り上げられ、より詳細な瓦の需給関係を検討されている。

第3章では、軍守里麿寺の瓦を取り上げ、消費地からみた瓦生産のあり方を検討されている。軍守里麿寺は一九三五・三六年に発掘調査され、多くの軒先瓦が出土し、創建時の様子が理解しやすい寺院跡である。清水さんはその資料を細かく調査検討され、分類を行われ、そ

れを基に関連遺跡の資料と比較検討され、創建年代を六世紀後半と推定され、その造営過程を明らかにされるとともに、生産窯（亭岩里窯跡と不明窯）の推定、工人の移動など詳細な検討が行われている。

第4章では、本格的に発掘調査がなされた亭岩里窯跡を対象としてその生産と技術について述べられている。清水さんも述べられているように亭岩里窯跡の報告書は遺物がよく整理・検討されており、内容の濃いものになっている。しかし、清水さんはさらにその後の陵山里寺跡の成果などもあわせ検討され、この窯跡における軒丸瓦文様の細分、技法の分類、丸瓦の特徴などを組み合わせて、操業年代が五六〇年代をさほど前後しない時期から七世紀前半までと判断され、この窯跡が「公的施設、あるいは国家的施設」と考えられ、工房における工人グループが複数存在することなどを明らかにされている。

第5章では、第4章までの内容を整理し、百済の造瓦技術と瓦生産体制について述べられている。造瓦技術については第2章の「大通寺式」軒丸瓦の整理を基に瓦工集団が六世紀後半になって複雑化する。ことを述べられている。瓦生産体制については、百済の瓦窯跡の整理を行われ、前述の造瓦技術・文様・胎土などを踏まえて未発見の不明窯をニカ所推定されている。そして消費地の資料として新たに旧衙里寺跡や東南里遺跡などを加え、生産地と消費地の関係を整理し、「遠隔地生産体制」・「瓦陶兼業体制」・「複数生産体制・複数供給体制（專用窯も一部あるが）」が基本的であることを述べられている。

最後の「結論」では、第1部の日本での検討成果と第2部の百済で

の検討成果を比較検討され、まとめられている。その「はじめに」において、清水さん本人も書かれているように、同じ分析方法で検討することで、両国の造瓦技術・瓦生産体制の類似点・違いなどがわかりやすくなっていると思われる。各章の内容についてはこれまで述べてきたので改めて述べないが、この「結論」のなかで全体の流れを整理してまとめられているので、つながりがわかりやすくなっている。そして最後に今後の課題として、検討資料を増やし、軒丸瓦以外の丸瓦・平瓦なども検討し、そして今回対象とした百済以外の新羅や高句麗、さらに中国の造瓦技術を検討し、「古代東アジアの文化的交流の歴史に位置づけ」ることをあげられている。

### 三

以上のように、本書は清水昭博さんの三〇代半ばから四〇代半ばの大きく飛躍していこうという時期の日本と百済の造瓦技術・瓦生産体制に関する研究が納められている。奈良県立橿原考古学研究所という古瓦研究において恵まれた環境の中で、本書の重要な部分を占めている豊浦寺をはじめとして、平隆寺、橘寺、東大寺、唐招提寺などすばらしい寺々の発掘調査に従事される機会を得て、多く学ばれたものと思われる。一九九九年には附属博物館において「蓮華百相―瓦からみた初期寺院の成立と展開―」を担当され、展示の準備や図録作成などにおいて、まさに本書の基礎となる部分を構築されたものと思われる。

その後、二〇〇二年から二〇〇三年にかけて九ヵ月間、百済の地にあ

る忠南大学校百済研究所に交換研究員として派遣されたことは、清水さんの研究に大きな弾みをつけたものと思われる。その間の精力的な百済瓦研究の成果が本書第2部に花開いている。

そして二〇〇九年三月に母校の大阪市立大学に学位請求論文を出され、博士（文学）の学位を得て、二〇一〇年四月から現在の帝塚山大学に移られた。現在は帝塚山大学考古学研究所所長・附属博物館長もされながら、講義・大学内外のいろいろな仕事をされ、本書の最後に書かれた課題を追求されているものと思われる。

近年、考古学の世界では、教育委員会など埋蔵文化財に関わる職に就き、炎天下・厳しい寒さのなか発掘調査に携わりながら一歩一歩着実に研究を進め、論文を書き、自分の研究成果を世に問いながら、学位論文として成果をまとめ、そして一冊の著書を出される方が少しずつではあるが、増えているように思われる。

清水さんもその一人であるが、疲れた体・頭で研究を進めることはやはり楽ではない。休日もいろいろな研究会に顔を出すことで、最新の情報を得ることができ、また自分の考えを世に問うことができる。

このような努力の中で、一冊の著書ができあがっていると思う。

本書はこれまで述べてきたように、日本の初期造瓦技術・瓦生産体制と、百済の造瓦技術・瓦生産体制を同じ視点・方法で整理検討することによって、わかりやすく比較できるようにし、日本の初期瓦生産のあり方を解明するとともに、東アジアにおける造瓦技術交流史の解明を目指したものである。清水さんの目的はおおよそ達成できている

ものと思われる。

ただ、このような書評の場合、問題点もいくつか指摘しなければならぬ。内容に関しては、細部において気になる点もないことはないが、基本的には賛同できる内容であると思っている。しかし、校正の時間が足りなかったのか、誤字や参考文献の漏れなどがところどころでみられた。また図の出典が漏れたのか、評者が確認できなかったけなのかよくわからないが、ところどころでの文献からの図なのか、また清水さん自身が作られた図なのか確認できないものがあつた。それからこれはある面では仕方ないのかもしれないが、例えば図3、図5などの〇〇寺式軒丸瓦の展開などの図は、一頁に収めるためと思われるが、瓦の図一つ一つがかなり小さくなっており、老眼の評者にはかなり判読しづらく、つらかつた。少し見づらくはなるかもしれないが、二頁にまたがるようにしていただければ、もう少し見やすかつたのではないかと思っている。

最後に、このような形で日本と百済の瓦資料を細かく調査研究し、比較検討した本書は、今後の日本の初期瓦、初期寺院の研究のみならず、百済瓦の研究書として大いに役立つものと思っている。日本と韓国の瓦・寺院を研究している方々のみならず、古代史を研究されている方々、古代東アジアを研究されている方々には是非一度読んでいただければと思う一冊である。

（岡山理科大学生物地球学部）